
ベタなRPGの中に入ってしまった

椎名 素一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベタなRPGの中に入ってしまった

【NZコード】

N4945Y

【作者名】

椎名 素一

【あらすじ】

主人公はベタなRPGが好きなダメ人間。

その友達の変人が、RPGの中に入り込まれます。

そこで、魔王倒しに行きます。

吸い込まれた（前書き）

この設定がベタだよね。

吸い込まれた

俺はベツタベタなRPGが大好きな、新高校一年生。第一志望の高校にギリギリで受かり、有頂天な気分に浸っている、ダメな人だ。そんな俺にも一応友達と言える人が数人……いや、嘘をつきましたごめんなさい。一人です、はい。

そいつは「俺にとつて変人と言われる事は、ほめられているのと同じだ！」と豪語する変態で

名は窪木夕と言う。ちなみにそいつは不登校かつネクラという疎遠される属性を持っている。俺こと奇運命はネクラで不登校になりかけである。

……「類は友を呼ぶ」とはこの事だろつか？自分で言ひて、もの凄く悲しくなる。

まあそれは置いといて。俺はこの前ネットで面白そうなRPGを見つけた。

名前は「魔王を倒そう」……普通の人には超超超つまらなく見えるだろう。

だがしかし、俺と夕はこの、実にベタベタそうなゲームが大好きだ。

そして一週間待って待つて待ち続けた。その間夕はもちろん不登校、俺は一週間のうち三日しか行かなかつた。そして……

「届いたあああっつー！」

俺は歓喜のあまり叫びながら自室を走り回った。

母親に思いつきし怒られた。

まそなな事は気にせず、すぐさま夕にメールした。

件名・届いたか？

本文：おいつ、俺のところにあのゲームが今届いたぞ。

簡潔にまとめて送信した。

すぐさま、返事が返ってきた。流石ネクラ歴五年の腕だ、速すぎるくらいの速さで返信が返ってきた。

件名：届いてるよ

本文：届いてるし
いやいやアーリーにして来るた

いらっしゃったがそれもまあ仕方が無い。

なはせあいこは子の的な勝負のノ、力にたからなる
00万は稼いでいるらしい。
それで毎月5

電源を入れた。

「ああああああああああ」――。「

と、もとの音に戻つた。

そして画面が真っ白になつた途端に、俺は体が画面の中に吸い込まれていく感覚に陥つた。

いせき 吸い込まれて いる。力升で

「え、ええ、何何何何！？ やだよー。 やだやだやだやだ。うー。

結局画面の中に入ってしまった。

俺の体は落ちてゆく、もの凄い浮遊感。そして真っ暗。目を開けているのに真っ暗って、気持ち悪いよね。

そして……

ドサッ

かなり高い所から落ちたのに、全然衝撃が少なかつた。なのに、足が全く動かなかつた。足の指一本も動かせない。目は徐々に見えるようになってきた。

部屋の中にいたはずなのによく下には土の感触があり、何かに覗き込まれている気がする。

……怖い、超怖い。だが俺も男、意を決して目を開けてみるとそこには……

犬がいた。三頭犬だつた。

「…………」

声が出なかつた。とりあえず、ゆっくり、ゆっくり後ずさる。だがそれに合わせて三頭犬の方も、ゆっくり、ゆっくり近づいてきた。

ゆっくり後ずさるのは無理だと思つた瞬間、犬に背を向けてダッシュしていた。

体が勝手に逃げを選んでしまうのって、情けねえなあ。

つて、そんな場合じゃないだろ俺！ とりあえず逃げるんだ！

俺は」のあと、俺と同じ境遇の奴に会つ事になる。

吸い込まれた（後書き）

気がついた所があつたら、指摘してください。

ついに冒険へ

俺は高校に受かって有頂天になつてゐるダメ人間。
友達もネクラなやつだけ、しかも一人だけ。

そしてベタなRPGが大好き。ネットで探しては買いあさつてゐる。
そして買つてみたゲーム「魔王を倒そう」……涎が出そなほどの
ベタベタRPG。

ゲーム機に入れて電源を付けてみた。そしたら……

吸い込まれた。

ゲーム画面に。

そしてモンスター（三頭犬）に追つかれられる俺。おっと、こんな
事を考えている暇に追いつかれたああああああああ！！

「ひいいいいい。く……つ、くるなあああ
「

お決まりの台詞を吐きながら逃げる俺。あ、あんな所に丁度良い穴
が開いている木が。

最後の力を振り絞れええええ！！

「うにゃおう¥#\$%&\$%%&\$#\$%\$%

力を出しすぎて口から変な声が出たが、気にしている暇が無いから
な。

そして……

「うりやあ

ガンッ！ ふー、間に合つた。さすがに死ぬかと思った。でも、も
うこの穴の中にいれば大丈夫だ。

ふー、ネクラに走らせる距離じゃねえなあ。こつこつ時は深呼吸だ
な。

スーザー、スーザー、スーザー、スーカサツハー？

おいちよつと待て、何か奥の方で音がしたぞ？……氣のせいだよ

な。まあ、まだ息が切れているので深呼吸、深呼吸。

スーカサツハー、スーカサツハー？、スーカサカサツハー！？、ス

ーカサカサツはああつつ！？

「うおおおおい」

なつ、何だ？ ちょっと、ちょっと。まだ死にたくない
よお。

「……数奇か？」

この声はどこかで聞いた事がある。あれ？ でもどこだっけなあ。

「……お前の唯一無二の親友を忘れたのか？ かなり傷ついたぞ！」

「ああ、お前かあ夕！」

おお、ここで唯一無二の親友と出会えるとは。全然嬉しくないけどね。まだ穴の外で犬がバウバウいつてるしね。

30分後

「なあ、もう犬去ったかなあ」

「……ああ、もう大丈夫だろう」

三頭犬の恐怖にさいなまれる事、三十分。ずっと穴の中で他愛もない会話をしながら耐えた（恐怖感じてないんじやね、ていうぐらいの他愛もない会話）その時、ふと声がした。

『いや～追い払うのに苦労したねえ』

「なあ、今のお前の声？」

「……ちがう」

「今のお外から聞こえたよな」

「……ああ」

と、いうわけで、穴の外に出る。そして空を見てみるとそこには…

…仏陀がいた。

後光が輝いている。

初対面なのでタメ語を使う。

「「えっと、助けてくれてありがとうございました」

『いきなりタメ語！？』

「「おお～」」

『えつ、な～に』

「「ノリ良いんですね」」

『うん、仏陀だから』

「関係ないよね！」

あれ？ 急に夕が黙つた。と思い夕を見てみると、田を開けたまま寝ていた。

凄いね。感心する。田の前に神がいるのにね。

『あら、寝てる？』

「わーせん」

『ねえ、その口調もうやめてくれない？ ま、いいや。とりあえず、どっちが勇者になるか決めて

「「ええ！」」

その宣言を聞いてすぐさま睨みあう俺と夕。そして……

「「俺がお供だつつ……」「

『ええええええええ……』

「「ジャンケンポン……」「

『ええええええええ……』

「ぐああああ

「……（キロッ）

「ぐああああ

『ええっとね、なんで脇役を争ってるんだい？』

「『脇役の方が見せ場多いからに決まつてんでしょう。』」

俺とタの長い説明が始まったので割愛します。

3時間後

『ああつ、もういい。数奇が勇者。タが魔法使いね
「ああああああ！」』

「…………（キラツ）』

『はいはい、装備と剣は着けといったから』

「「えつ」

はつ、いつの間に！ もつといつなんかねえ、ピカツとなるとかな
いもんかね。

『じゃあ、東にずっと進んでそしたら町があるから』

「おいつ、何ていう町か教え……つ

シコツ

一人取り残された。

「……行くか……」

「……行こう！」

とりあえず腰についてたコンパスで、東はどうちかなあと探して、
とりあえず東へ向かった。

このゲームの世界で何とかやつていけるだらうか？

俺とタはそんな心配をしつつも、魔王を倒す冒険へと出かけた。

初バトルと新仲間（舞踏家）

テレテツテ～テテテツテテ

何もないところからBGMが流れてくる。

お馴染みのドラ○H定番ソングだ。

……てか、ドラク〇のBGM使っちゃダメだよね。中国並みのパクりもんだよ。

「……なあ、数奇。俺たちなんで勇者と従者になる事、をあんなに素直に受け入れたんだ?」

「…………うん、それ言っちゃお終いだろ。俺も思つてたけどね
確かに。たぶん現実じゃあろくな生活送つてないからだろ?な。
ネクラ〇n不登校だし、モテないし、オタクだし、ゲーム中毒なり
かけてたし……

もうこれ以上自虐すると心が折れるので、もはや言わないでおく。
あともう一つ思つていたことがあるのだが。

「お前の格好いかにも魔法使いだよな」

そう、格好がベタ過ぎるのだ。

体全部を覆えるぐらい長いロープに、いかにも「魔法使いです!」
って感じのステッキ。

ロープの内側には小さなダンボがいっぱいあり、「ポーション」とか
「攻撃」とか書いてある。

なんでロボじゃないで「うわ」なんだよ! とつっこみたくなる。
まあそれはいい。ベタ過ぎるけど、夕の格好は良い。

それに比べて俺は……

「……ふつ、似合ってるだろ」

イラッ

「嘘つけ！ 何でポロシャツに入れパンで頭にネクタイ巻いてんだよー！」

「何で腰と足だけちゃんとした装備なんだよー！ 足と腰だけ見た
らむちむち強そうなのに、上半身で台無しだよー！ しかも装備
が 武器A：フィギュアの入った紙袋 つてなんだよー！
「これあれだよねえ、『30過ぎて童貞な人は、魔法使いになる
だよねえっ！』

何であんな迷信の装備に固められるの？ もうこれ装備でもないよ
ね。

「……仏陀が決めた事さつ（キラッ）」
「黙れええええつつつつー！」

もう、ブチ切れた。

たまらず叫ぶ俺、聞き流す夕、微笑ましくじり見てる仏陀。
……落ち着け俺。いきなり文句言つたら装備を変えられるかもよ（
もつとひどく）

そして心を落ち着けた俺は、仏陀に文句を言つ為口を開いた。

「…………あの、この装備……変えようこのクソがあああつつー！」

あ、本音出ちゃった。

『まあまあ、おーちーつーけ』
「これが落ち着いていられるかー！ しかもつぜー」
『はいはい……』

急に黙る仏陀。鼻をほじつながら目を強くつぶつて、何か念じてい
る感じに見える。

と、次第に仏陀の周りの後光が強くなつてピカッと光つた。
瞬間、俺の体にかかるずつしりとくる重み。

自分の体を見てみると……凄い。

なんかもつ、凄い、しか出てこないほど綺麗な鎧があった。
自分の語彙の少なさが悲しかった。

『ほー、こんなもんでどうよ』

と血漬けに言つてくる仏陀。

ここは素直にありがとつと叫つ

「あつがとう」ゼこました（最初かられにしとせや）

『神に向かつて何だよその口の聞き方は

「別にいいだろ」氣へこへするへな』

『うつぜー。いやもうマジうつぜーなー』

心を読まれた事はあえてスルー。

「じゃあ、これから冒険するんで」

『あ、ちよつと待つ……』

シユツ

よし。

「じゃあ行くか。タ

「…ああ

神に暴言を吐いたことこなught何も触れてこない。タ、さすがだ。

普通のRPGだったら神に暴言は禁忌だけどね、あれはむづ過ぎだ
つたからね。

そして他愛もない話をしながら歩き出しあうとした途端、バトルBG
Mが流れてきた。

「つおつ」「やつとか

身構える俺とタ。俺は腰の剣を引き抜き、タは杖を構える。

テレレレレ

バトルBGMまで〇ラクエだし。

モードがヤンマフカ現れた。すぐRMDモードが現れた。

敵A：ス○イムが現れた。

敵曰：「あは、〇が現れた

○ラクエパクつてるし、銀○パクつてるし、最後にい

の
人
た
し
！

一〇二

「…よし、殺るか」

「ねえ、何が『よし』なのお！」

と云つても、自分のチャンスのパソコンを選ぶ俺

・戦う・逃げる・スペシャル・超必

おお、いきなり超必あるじやん。でもまあ無難に「戦つ」だらうな。
と、「マンド」を選び終えた俺は、夕の「マンド」も気になつたので覗
いてみた。

- ・「死に絶えろクズビもつ！」・「消え去れ」・魔法・「世界支配」
・逃げる

「ちょっと待てえええっつー！」

夕が迷わず「世界支配」を押そうとしたので、慌てて止める俺。
「つか何なの？」このコマンドの違いは。

もう最後の「逃げる」にいたっては意味が分からねえ。
どっちで言っているの？ 相手に言つてんの？ それとも俺に言つて
んのー？

「なぜ止める。これ押したら魔王も支配でききて、ゲームを終わらせる
事ができるんだが」「あ、確かに。

……いやつ、ちびーよ。危ないなあ俺。言い包められそうになつて
んぞ。

「いやつ、自分たちの力でもうつてみよーぜ。なつ」

「…しようがないな」

と夕は「魔法」のコマンドを押した。
そつするとまたコマンドが出てきた。

・デスボ〇ル・ベホ〇マ・アルマゲドン・エキレ・ユウ

「「作者ああああ」」

もうパクリ過ぎだよ。次はギリゴ〇ボールかよ。
もういいよ。

夕と俺は一気にテンション、ダダ下がりで適当に「デスボ〇ル」を
選んだ。

・誰にしますか、と出ってきたので俺はスライ〇を、夕はまゆゞ〇を
選んだ。

「……つー」

タツタツタツタツ

俺の足が勝手に動いて、スライ〇の前まで来た。操られてるみたいで気持ち悪かっただが、剣をスライ〇に向けて振り下ろした。その刹那。

ブツシャアアアアア

スライ〇が血を吹いて倒れた。そして消えた、血も一緒に。

「……リアル過ぎるだろ！」

心から思つた言葉だつた。

そして夕も、まゆ〇〇に向けて「デスボ〇ル」を放つた。

「ぐりえ、デスボ〇ル」（効果音・フリ〇ザ様の声で）

地響き、爆炎、煙。

「デスボ〇ル」が当たった所は、何もなかつた。本当に何もなくなつていた。

綺麗に吹き飛ばされていた。

あまりの威力の強さにドン引きした。

「……ふつ」

殺つた。という感じで、笑みを浮かべた夕を見て引いた。さすがになかつた。

そして相手のターン。

「わたしを仲間に入れてくれださい……」土下座した。

「わたしを仲間に入れてくれ下さい……！」

「デスボ〇ル」の余波で放心状態だった俺たちは、「うん」「うん」と言つた。

「ありがとうございます！ ジャ、こきましゅう！」
と、嬉しがつてる舞踏家に元気あられれるようにして俺とタは歩いていった。

俺は最後に一言呟いた。もうめづらやくひやだ。

「わ、現実世界にもどつてしまええええ！」

新仲間・リク（女舞踏家）ステータス

HP・1000 MP・1

技　・ひたすら踊る　・回復の舞　・攻撃つの舞

装備　・Tシャツ　・ジーパン　・アディダスの靴

初バトルと新仲間（舞踏家）（後書き）

パクリ過ぎてすいません。

町への道のり

「せへ、行きましょ」

「「お、おお～」」

よつ、数奇だおつー

……うん、超×100気持ち悪かったね。ごめんな、無理にハイテンションショーン風にしてみたけど、やっぱ気持ち悪かったね。でもね、無理にでもそういうテンション作らないと無理そうなんだ。

……だって一人増えてるんだもの、仲間。

俺が覚えてるのは……

(回相中)

「くひえ、テスボ○ル」

爆炎、地響き、煙。

(回相終了)

これだけなんだよね、わざわざ(回相中)とかつけなくていい長さだよね。

まあそれはいいとして、とりあえず素性を知らなければ。
ここでの無難な策、一番・名前を聞く、実行。

「あ、あの～」

「…何だ、下手に回って気持ち悪い」

「お前じやねえよー、流れで分かるだろ? がー…」

「……ああ、なるほど」

「この女の素性だろ?」と小声で囁いてくるタ、「ああ」と返す俺。

小声でひそひそと作戦会議する俺とタ。そして俺たちはある一つの結論にいたつた。

「「そうだ！ ウィンドウを見よ！」」

その結論に至つた俺たちは、即座にウィンドウを呼び出し（頭の中で「来い」と念じると出でくる）

『仲間プロフ』と表示されてるものにタッチした。

その瞬間、空を飛ぶ鳥が空中で静止し、笑顔の女の人気が片足を上げたまま止まつた。

おお、リアル。本当にゲームの世界みたいだ……ってゲームの世界なんだけどね。

名前：（無し）

女：舞踏家

L V : 10 H P : 150 M P : 50

「メント・重い過去がつ！？」

「普通だな」

「…ああ、普通すぎでびっくりしている」

「うん」

いや、でも最初からLV10つて強くな。 つうか「重い過去がつ！」って何だよ。

「…スラ○ム戦の時に、経験値1万5千くらい入つたしな」「何でスラ○ムでそんなに経験値入るんだよ」

「…金も百万ぐらい入つたしな」

「マジで！？」

いや～スラ○ム案外いいな。ただの弱い雑魚だと思ってたのに。

「でも、名前ないんだな」

「ああ」

そり、何でスルーしたんだひつね。しかも、舞踏家だしね。

「…もうネロでよくない」

「超、適當だな！ まあいいけど」

「こじで良いって言つちやう俺もどうかと思つたびな。

あ、そういうやあ俺たちのプロフってどうなつてゐるんだひつ。

と、いう訳で俺の情報にタッチ。

名前・数奇 運命

男・勇者

勇者って職業に入るのか！？

L V : 20

最初つから10LVだつたんだ。

H P : 250 M P : 150

おお～、さすが勇者。高めに設定されているな。

「メンツ・「いぬねお¥\$%&%&%\$」

「ロメンツ・ひびりー これ一番最初のやつだよね」

まあ、こんな感じのプロフィールだつた。

と、こじで気になるのがタのプロフィール。だつて魔法の技が全部殺し系だつたし。

と、こう訳でタッチしてみる。

名前：デスブレイカー・タ

男・闇の魔法使い

L
V
:
1
1
0
0
0

H P : 1 0 0 0 0 M P : 5 0 0 0 0

コメント：死に腐れクズども。俺の上に立つな、俺の下にも立つな。
消えろ。

「...」

おかしかったな！ マジでハケニてるよ、このゲーム。
デスマブレイカー・タつて何だよ。どこで付いたその二つの名！
ントもいきりすぎだらうが！

と心中で発狂した。主人公俺だよね。

夕は俺と一緒に自分のステータスを見て「フフッ、ふふふ」と不気味に笑っていた。

もうマジで戻りてーなあ、現実に。

* * * *

かくして、俺たちは一旦ウインドウをしまって、舞踏家ならぬ「ネロ」に名前が決まったと伝えた。

「は？ 何の事ですか？」

切り込んだあああつづつ！ あまりにも、これなりすげじやなかろ

うか。

「はっ、何故それを！？」

乗っちゃうんだ……

「……という訳でネロとこうなったんで

「分かりました……ポツ」

何で照れたんだろう？　あ、名前付けられて嬉しかったのか。
ああ納得。

「……さあ行こう町はもうすぐだろ？」「ひう

「はい！」

お~い、ちょっと主人公俺だよ。俺だよつ！

……行つちやつた……ついて行くか……

何かぐだぐだだつたけどなあ。

町への道のり（後書き）

今日は調子が悪い作者が書いたので、下手な文法とかになつてゐる所があつたら、指摘してください。

脱出のススメ（前書き）

頑張って書いてみよ! ついで思こます。

脱出のススメ

「　「　「はあ　「　「　
どいつも、数奇です。

今俺たちがいるのは、プリズンです。……かつてよく言つてみた
けどここは、牢屋だ。

口調も、ですます口調から普通に戻させてもうつることにある。
と、ここでネロが俺に問いかけてくる。さつきから何度も同じ事し
か問い合わせてこない。

「あの、どうやって出ます?」

「今脱出経路を探してゐるから待つてろ。」

「は、はい!」

俺と夕が声を揃えて怒鳴ると、ネロは『すいませんでした』といつ
ように牢屋の隅に腰掛ける。

ここで現状をまとめておいつ。

今俺たちがいるのは牢屋、これは間違いない。床……ではなく下は
土。壁はレンガ。小窓が付いているが鉄格子がはめられている。ま
あ普普通の牢屋だ。

夕の魔法を使えばこの世と吹き飛ばせるの、なぜこんなに苦労
して脱出経路を探しているかといつと。

「何で夕さんの魔法使わないんですか?」

「お、来たああああ! 待つてましたこの質問。

そして俺と夕は田を合わせ、息をそろえてこう言つた。

「絶対に脱出経路か、フラグがあるー だつて、ベタなRPGダ
カラ!」「

最後はやっぱりチャン・ドンゴン。古こと思つた。「だから」と
いう言葉の最後はチャン・ドンゴンだと俺と夕の間で決まつている

から。いや、そんなどうでもいいことは置いといて、なぜ牢屋にぶち込まれているのかを説明しようと思つ。

1 時間位前？

目の前には道、果てしないと思えるほど長いクネクネと曲がった道。スライム戦が終わってから敵にも会わない、人にも会わない。さすがにおかしいと思いつつも、6時間ぶつ続けで歩いていく。既疲劳困憊だ……タ以外は、だけどね。

「も、もう休みませんか」

「賛成の意を表示する」

「…もう休むのか」

「現実世界でのお前よりかはましじやー」

「…今はRPGも世界にいるんだぞ？ そんな屁理屈が通用するとでも思つたか？」

うわっ、うぜー。確かにその通りだけど屁理屈はタが言つて居るよね。

「…ふんつ、仕方がないな」

お前何様だよ。勇者俺なんだけど……勇者俺なんだけど…？

そこまで思つてふつ、とネロと一緒に腰を落ち着けようとしたところで……

「…と、言つとも思つたか？」

「うひぜえええええええ…！」

「うひぞいですううううううう…！」

一人揃つて膝を折り、地面に手を着き完全に降伏した。

「…ああ、行くぞ」

とタは言い、先に歩いて行つてしまつ。

鬼畜！ 鬼！ いやつ、歩く殺戮兵器… と心の中で毒づきながら

ネロと何とか立ち上がる。

そういうえぱタ、何で疲れないんだりつへ、ふと気になつたので夕をよーく観察してみた。

……おおすじにういている……おつと、危ない。怒りのせいで棒読みになつてしまふ所だった。

もつすでになつちやつてるけどね。

そして俺は鞄」と剣を背中から外し、夕に襲い掛かった。

「うおらあああつつ！」

それを華麗に避ける夕。

俺の横なぎ、縦なぎを避けながら、俺をなだめようとした猫なで声で話しかけてきた。

「……お、おい、やめろ血迷うな、浮いている事にこくては謝ひつ。だが俺は何もしていない。

疲れるから歩きたくないなあ、と黙っていたら勝手に体が浮いていたんだ」「はいっ、確定」。

「おー、俺はまだ何も言つてないぞ？　なのこじりじて弁解しづうとする」

「……ギクッ！」

おお、初めて「ギクッ！」って言しながら飛び出すのやつ見たわ～。ずっと昔から「何でアニメとかの人物が飛び出すの、『ギクッ』って言うんだろう？」

とは思つていたが、実際にいたんだなあ。

……おつと、感心している暇じやない。今はこいつを殺らなければいけないといつ、最優先事項が目の前にぶら下がつている。

「夕……覚悟はいいか？」

「……や、やめる。く、来るな、寄るな、近づくなああつつー。あ、あ、リンクタイムの始まりだ！」

「ゴキッバキャッバキッボゴッグシャッブツシャアアアツツツ

おつと手が滑った、鞘外しちゃったなあ。

俺が夕をリンクに似た殺人行為してると、ネロはボーッとリンクを見ていたが、ふとこんな事を言つた

「はあ、本当に疲れましたね、宿でもあればいいんですけどねえ」と、この言葉がフラグだったようで、道の端っこに宿ができた……この表現には語弊が合つたので言い直すと、現れたというほうが正しい。

「……丁度良かった、入るか」

「いつの間に!? というか回復系の魔法あつたんだ」

「……応魔法使いらしく、補助系の魔法もあるぞ」

まあ、いい。じゃあ行くか、と言おうとしたその時。

ネロがまた俺の台詞を奪つていた。

「じゃあ、入りまっしょつか」

「ねえ、それ俺の台詞。どちらいでくれる?..」

「……ああ、行くか」

「ねえ、話し聞いてる?..」

と、また置いてけぼりを喰らう俺、悲しそぎるよ。
と思いながら入つていった。

宿の名前は『魔王の城』……絶対に化け物が幻覚見せてるよね。

『魔王の城』に入ると『魔王の城』のウェイターが「勇者様ご一行ですね。話は魔おう……つ、ゴホゴホ、仏陀様から聞いております。では、『ご食事の方へご案内いたします』といつて大きなテーブルに案内してくれた。

……うん、思いつき魔王って言ひそうになつたよね。でもね、つっこまないよ。

だつて待ちに待つたフラグが立つたんだもの。

そして運ばれてきた料理を一口食べた途端、一人一人料理に顔を埋めていた。

最後まで耐えた俺も結局は眠ってしまった。

終了

で今に至る。ちょっと疲くなってしまったが、まあこんな感じだ。
ふう、こんな事を考えていたら、夕がダウンして、ネロも寝てしまつていいではないか。

はあ、魔王を倒すのにも苦労するんだなあ。
と思ったところで急激に眠気が襲ってきた。
最後に一言残しておくか。

「睡眠欲に勝てるやつは……な……ふい……」

朝

「ふあ……」

俺は日が覚めた。ここはどこだ? 何てな。

小窓からは朝日の光が差し込んでいる。実に気持ちいい朝だ。ん
暇だから階がいるか確認しよう。

夕は居る。ネロも居る。そしてデブも居る.....え、デブ?
はい、緊急事態発生。

と、いうわけで階を起こす(デブ以外)そして相談する。

「おー、どうする?」

「...殺るしかないだろ」

「そうですね」

「なんでもうなるー? ネロにいたっては寝ぼけてて聞いてないだ
りー!」

予想どおりの答え。一応ひいむ。

ゴンゴソッ

Г Г Г Г - Г

やべえ、起きたやつだ。

そのテープが自分に掛けっていた毛布をかばんの中にしまい、「はあ、またか」と言つてドアに近づいて、鍵穴の中に針金を入れ、がちゃがちゃヒピッキングし始めた。

その「トブ」がピッキングし始めて5秒後。

ガチャヤツ

鍵が開いた。

「…………」

そして元気は当然のように出で行つ……

「わのきかうテブテブ言一過だよおおおつひひひ...」

新たな仲間が増えたな、と思った。

脱出のススメ（後書き）

ふう、書けた書けた。

新仲間・デブと共に宿D.Eバトル。

俺は勇者、こと数奇だ。

今俺は新たなる仲間が増えた瞬間に出てくる。牢屋を出て地下迷宮を抜け、地上に出る階段の前で。

先ほど俺たちを狭い牢屋の中から出してくれた、このバトルの時は何もしなかったデブは……

「デブって言わないでください！」

……」のよう人に心の中を読めるという特殊能力を持ち合わせている。気になつたのはデブだけだつたらしい。

そしてフラグが立つた宿で出会つたため、仲間にすることを即決した。

そして説得しながらこの場所まで来た。

このデブは……

「も、もういいですよデブで！ ポッチャリなだけなんですよ！」
かなりの銭ゲバで貪欲だつたらしく、夕が「……この勇者一行の仲間になれば、金と地位と名誉が手に入るぞ」と、言つとすぐに「仲間になります！」と、驚きの速さで仲間になる事を承諾した。と、こんな事がありながらも、敵を倒しながらまあ、ほとんどタの『死に腐れクズ共』で一撃だつたのだが、ここまで来た。

その間に俺たちは全員10LVぐらゐは上がつた……全部スラ○ムでね。

ここでデブについてのプロフィール……

「やつぱりポツチャリつて言つてください……」

「一々うるせえんだよ！ セツキからよお、何なんだよ人の心の中好き勝手読みやがつてよお。

てめえの事を読者様に紹介してやつてんだぞ！？ 黙つてろこの

デブ！ メンバーから外すぞ！

「すいませんでした！」

即座に下座して来た。ほんとに金の為ならプライドなんか捨てれるみたいだな。

た
い
た
な

絶対にこういう奴にはなりたくないな。
もう、プロファイールを説明するのはめんじくせくなつてきたんだが、
一応仲間なのでしておこうと思つ。

L
V
:
1
5

H P : 50
M P : 150

とまあ普通に平均値だ。あ、もう一つ忘れていた。

•
デブ

うん、すっかりした。

テフは俺の事を恨めしそうな目で見つめてきたが無視した。誰だつて次がこの宿のボス戦だつたらそうするだろう? ボス戦の前のバトルが全部ス○イム しかも能力値がスラ○ムじやないだろつ! つてびっくりするほどのスラ○ム は、どうかと思うけどな。

まあそんな事はいし
どりあえず次かホア戦なので
じきかりと

「…よし！ 行こう！」

う、嘘だろー。な、何でここまで……ひどい扱いを受けなければならぬーー。

そして俺は今一番思っていることを腹の底から空……天井に向けて言い放つた。

俺の叫び声は虚しく地下深く魔で響いた。

そんな俺を気にもしていな様子で、皆、上に上がる階段を上つて
いった。

俺はプライドがズッタズタのボッロボロになつたところで、やつと
動いた。自分で動かしている感じではなかつた、たぶんバトルが始
まるから自動的に戦闘場所へ連れて行つてくれるのだらう。
もう、あんなやつらとやつていける気がしなかつた。

テレレレレレレレレ

そしてバトルが始まつた。

場所は先ほどの宿のロビーだつた。

そして出てきたボスは……一番最初に出てきた「魔おう……つ、」
「ホゴホ」のウェイターだつた。

すっごくベタベタな展開、涎が出てきそつだ……じゅる。

とここでウェイターが最初の時とは正反対の野太い声で喋り始めた。
少し怖い、腹に響く声だ。何かにたとえるとすると……和太鼓みたい
だ。

『ふははははは、よくぞここまで来れたな。それだけは褒めてや
う。

しかし、お前らを魔王様のところへは行けん。なぜなら……』

ふつ、その先は言わずとも分かるぜ。

といつわけで、台詞を横取りするぜー

「「「ここで死ぬからだ！」」

俺と夕は全く同じタイミングかつ、声をハモさせて台詞を横取りし

た。

「ついつきに息が合ひのが親友だよな。

『合図を取るなああつつー!』

「ナースイッチ」「!!...」

褒め称えるぜ!

『え、そり? なーんか照れるな……じゃない! いいからバトルに入るぞ!』

「いや、もうバトルに入ってるんですけど」
的確につっこむ俺、うーんいいね。ナルシストじゃないよ。
そしてバトルウインドウが開かれ、敵の名前、LV、HPが現れた。

菟威蛇亞
ウェイター

LV:15

HP:100

「「「「名前がウェイターだたあああつつー!?」「

全員でつっこむ。そして、すげえ弱い。

まあ、今はバトルに集中だ。

そして俺たちの名前、LV、HP、MPが現れた。

数奇

LV:30 HP:300 MP:200

うん、さつきの連續スラ○ム戦で10LV上がったもんな。

タ

LV : 12000 HP : 15000 MP : 10000

一人だけ数値の上がりかたがパネエ！

ネロ

LV : 25 HP : 250 MP : 150

いたつて普通だな。

デブ

LV : 20 HP : 170 MP : 250

この中では一番弱いな。

そして俺たちは、各自ウインドウから技を選んだ。

俺：一連切り

ネロ：攻撃力うの舞い

タ：デ○ボール

デブ：ホット

俺が選んだ 二連切り はスラ○ム連戦の時に覚えた技で、ネロ、
夕はもとから覚えていた技を選んだ。俺たちの技は名前を見て分か
るのだが、デブの選んだ ホット の意味がわからない。
まあ、それはお楽しみという事だらう。

俺たちの方がレバが高かったので、先攻は俺たちになつた。
……さらば魔威蛇亞。お前は見せ場なくして終わつたな。

「攻撃力うの舞！」

おいおい、勝手に始めんなよ。

そしてネロは舞い始めた。舞うといつても片足立ちして、クルクル
と回つていただけだつた。

ネロがクルクルと回り終わつた（決めポーズとか全くなかった）瞬
間。

ガチヨンキョ

とこう音と共に赤いベールが体を包み込んだ。

最初は何の効果もなかつたのだが、だんだんと腹の底から力が沸いて
来るのが分かつた。

舞い終わったネロは一步下がり、代わりにデブが一步前に出た。

デブは手を上にあげ、かつこいい……と、自分で思ったのだろう決
め顔を作り、「ホット！」と叫んだ。

俺と夕は何が起ころうとわくわくしていたが、結局何も起こ
らず、デブも一步下がつた。

……ちよつと納得いかないな。聞いとくか。

と、俺はデブに近づいていき、何の呪文かと聞いてみた。

「おいデブ、何したんだよ」

「は、はい。もう少しでも始めますよ」

「へえ、何、毒とか？」

「違います。文字の意味考えてくださいよ」

「ホットだから燃えるとか？」

「あ、はい。ある意味そうですね。」

「ん？ 何だ？ と思つてると、急に荒威蛇臣が『つかおおおおおお』

『…』と叫びだした。

『…』ふいにウイングウが開いた。

『荒威蛇臣の心が燃え盛った』

「嘘だりおおおおおおお…。」

松尾課称造になつてゐる。

『もつと熱くなれよおおおおお…。』

『ひねり…！ 予想以上にひねり…！ 薙苦しこ…！

なので、問答無用で切る。

「一連切り…。」

ズシュツ、ブツシャアアアアツ！

鈍い音が響いたと思つた瞬間、血が吹き出していた。

『…こんな怪我は治ると思えれば治るんだ…。』

暑苦しい…！ もつやつやえタ…

「テス○ール」

地響き、爆炎、煙。

この技を始めてみたネロは「わあ、凄いですぅ」と言い、「トブは「あ……つ」と、言葉を失っていた。

まあ、始めて見たときはそうなるよね、ネロ以外はだけど。とここでウィンドウが現れて嬉しいお知らせをしてくれた。

その前に菟威蛇亞に追悼の意を捧げよう。俺は手を胸の中心に当て「安らかに逝きますよつこ」「と願つた。

『菟威蛇亞を倒しました!』

そして俺のウィンドウからも手に入れた経験値などが表示された。

『経験値1000を手に入れた。金を150000手に入れた』

相変わらずバグってるんじゃねえか? と疑問を持つくらいの金だな。

そんな事は置いといて、とりあえず俺の目標は、町へ早急に行かなければ行けない。

そして台詞を言われてしまふ前に言わなければならぬこと言つ事だ。よし、息を大きく吸つて……

「よし、こ……つ」

「…よし行くか」

「はい!」

「は……い」

「もひ、心が折れたよおおおおおつつー」

…そして観者一行は町へ急ぐのだった。続く。

「最後の締めの言葉まで言われたら、おしまこだよおおおー。」

つづく。

町への最終難関

「　「　「　はあ…………」「　「　「

どいつも数奇だ。この挨拶は定番にしようと思つてゐる。

……つて挨拶の事なんか今はどうでもいい！

俺たち勇者一行は大きな山のせいで立ち往生している。

何だ、そんなの夕の魔法で消し飛ばせばいいのに、つて思つたやつもいると思うがそれができないんだよね。さつき仏陀を呼んで会話をしたんだけれど……

10分前

「うわっ、なんだこの山。でかすぎだろ」

「…確かにでかいな」

俺たちが今何しているかと聞かれれば答えてあげるが世の情け超氣持ち悪いな。

今俺達が何をしているかといつと、ウエイター菟威蛇亞を倒した後すっと歩いてたんだよ。

とにかく歩いてたんだよ。そしたらよ、でかい山があつたんだよ。正直めんどくさいだら登の。

まるで勇者とは思えないよね、この口調。

と、いう訳で仏陀を呼ぼう。

はい、セーの

「仏陀―――」

その瞬間この世の光とは思えないほどの眩しい光を出しながら仏陀が出てきた。

『はーい、仏陀お兄さんだよ。皆元気~？』

わあ、皆声をそろえて……

「 「 「 キモツ……」 」

『 』の流れ作ったの勇者じやん…』

「 今日もシッコリが冴えわたってます」

『 え、あ、やう? 何か照れ……無いよ! 』
『 あ、ほんとに冴えわたってるぜ。』

ボケて気持ちいい。
とここでデブが、眉に皺を寄せながら仏陀がいる辺りをきみへりあむ
ると見ていた。

「 おこ、どうしたんだよ! デブ」

そう聞くとデブは逆に信じられないという顔で、逆に聞いてきた。
「 えつと、数奇さんは誰と話しているんですか? 」
「 え、仏陀だけど……あれ、もしかして見えないの? 」

「 はい」

それを聞くと仏陀は面白そうな顔をした。

『 へえ、俺の姿が見えないほど汚いやつがこの世にいたんだな』

「 ……」

「 え、何て言つたんですか? 数奇さん」

『 へえ、俺の姿が見えないほど汚いやつがこの世にいたんだな』
「 ひつどー。そんな事神様が言つんですけど、

「 言つよ平氣で」

ぎやあああつ、僕の神様へのイメージがあああつ! ヒデブが地面
をじりじり転がつまわつている間

本題に入る事にした。

「 ところで仏陀よ、この上り下りすんだよ」

『 いや、まあ教えてもいこねどか、その口調直すつもつせ……』
『 無い! 』

「『ジックリマーク付けるぐら』の勢いで言わなくとも……、まあいいや。

』の山はね、登るしか……』

「はい、あやした」

『ちょひ、まつ……つー』

仏陀はシュンツと消えていった。

終わり

で、どうしていいか分からなくなつてね。

皆で考えているところだ、考え始めてかれこれ30分にもなる。

「あの、私考えたんですけど」「と急にネロがしゃべり始めた。

そしてこの状況が打開された。

「タさんの魔法にアルマゲドンつてありましたよな。それでこの日吹き飛ばしちゃえばいいですか

「……それだ……」「

もう//ラクル連発だね、ネロは。

と心中で褒めつづタにがんばれと声をかけた。
そして……

「アルマゲドン」

とタが唱えた。

俺たちは何が来るかな、何が来るかな、とわくわくしながら待つていたが何も起こらず、5分ぐらいが過ぎた。

「おこ、『アルマゲドン』は失敗か

「……いや、そんなはずはない。しっかりと力を感じた

「じゃあ、何で」と言いかけた時ネロが「あれはなんですか?」上空を指さして言った。

卷之三

俺とタビデブは空を見あげた。

空には高速で近づいてくる、丸くて、岩みたいな物体があつた。俺は頭の中で計算して、あれの正体がわかつた頃には走り出していく。

「ちよこ、何で走るんですか?」と聞きたながら俺に走ってきてくれるネロ。

「……………」何者も聞かれてる俺。

「まつはつはつまつ、ふうはははははははははははは」

高笑いってなんだよ！ 恐えよ！ まさか、夕が魔王とか！？
と思い立った瞬間、隕石が地面とぶつかり、すさまじい衝撃波と爆
発を起こした。

そんな中夕は爆炎に飲み込まれながらこう語っていた。

「すべての生物は我にひれ伏すがいい！……！」

「夕のバカツ」（さ〇ーず二〇風）

とツツコんでいた時にはもう、衝撃波に飲み込まれ意識がなくなつていた。

町への最終難関（後書き）

今回は面じない要素ないです。

町に到着？

「「うう……」

どいつも、数奇だ。

俺は今どこにいるか分からぬ。といつも、体のどの部位がどの部位か分からぬ。

体を動かそうとすると猛烈な痛みが体中を電気のように駆け巡る。おお、マジでヤベエ。痛すぎる。

「おい……おい、大丈夫か？」

あまりの痛みに意識がもううつとする中、その声をかけてきた人物のほうに顔を向けると、それは夕だった。

昔からこうじうやつだった、自分のせいで友達がいけないことになつてゐるのに平然と声をかけてくる奴だった。

……超イラッとする。

「大丈夫なわけあるかああうつ……つー 痛いうつつー！」

上半身を叫びながら起こした瞬間、この世のものとは思えないほどの痛みが俺を襲つた。

あまりの痛みにああああ、と言つてゐると夕がため息をつきながら杖を構えた。

「そんなに急に動くからだう。はい、リカバリー

「何でお前がため息つい……つ、いつてえええつつー！？」

夕が回復魔法を唱えた瞬間、ガチヨンキヨという音とともに、猛烈な痛みが襲つてきた。

「ぐわあああうつうつー！ タてめえ何してんだよおおおうつう！」

と詰つとタは「教えてやれ!」と詰つてから偉大ひでん腕を組んで説明し始めた。

もちろん、この間にも痛みは続いている。

「…俺の…か、い、ふ、く、け、い…」

「いいから早く言ってくれええええ…」

「このサド、ドリ! 僕が痛みで悶え苦しむとこの辺に、それを見て面白がつていやがる。」

俺が叫びながら頼むと、タはニヤツと笑つてから、やつと説明した。

「俺は回復系統の魔法使いじゃなーからな」

「そんな」と分かってるんですよー。

そしてこの会話の間にも俺の痛みは、どんどん増していく。

「…俺が回復魔法を使うと、行使されたやつは、痛みに苦しむが、それと引き換えに回復…………しない」

「それって相手を拷問するやつだろおおおつつつー!? 意味ねえじやあああつんー!」

「とここのせ嘘だ」

「お願いだから本当のこと言つてくださいまああつつつー…」

負けた。これで通算6回も心が折れたことになる。

そのあとタはやつと本当のことを言つてくれた。

嬉しくないことだったけど。

「…まあ、そのまま待つて。じきに楽になる……かもしれない」

「おおおー、てめえ今なんつた! ? 僕このままじゃ死ぬよ! ?

勇者早くも死ぬよ! ?」

もうここで終わるのか。短い旅だったな。

何て考えていると、だんだんと体中を駆け巡っていた痛みが引いて

いき、夕が「リカバリー」を喰える前からの痛みも綺麗さっぱり消え去っていた。

「…チツ」

「今何で舌打ちした！？　お前やつぱり俺のことを殺す気だつたろー。」

「ああ（キラシ）」

「キラツじゅねえよー。」

何か一番危ないのは夕な気がしてきた。

「なあ、夕。他の町はどうした？」

そうそう、やっぱ勇者は仲間のことを一番に思わなきゃね。

俺って偉い。

夕は少し考えてからこいつ答えた。

「…「うーん、殺つちやつた」

「ネロおおおつつつ…！」

うう、絶対に勇者一行には紅一点が必要なのに！

と悲しんでいると、「何で僕の名前は呼ばないんですか！？」と言

いながら、瓦礫の山からデブが出てきた。

「お前はお呼びじゅねえんだよ」

「僕の扱い時間が経つにつれて酷くなつてません！？」

くつ、こんな使えない魔法使い見ぬいなんていらねえの！」

「数奇さん、呼びました？」

おお、この町は…と思つて、デブが出てきた瓦礫の山のせいで田を向けると、そこにはネロがいた。

ネロが生きていたことに感動している俺を見て、夕は「名前で騙されてるんだよ」と言いながら俺を見て爆笑していた。もう、慣れてしまつたのでツツコまなかつた。

とにかくで今いる場所なんだが……凄いことになつてる。

氣絶する前にあつた標高20000m越えの山は、跡形もなくなり、山があつた場所には直径約500mぐらいの綺麗なクレーターができていた。

そして極めつけは

.....

誰も声を出さなかつた。そりやそつなるよ。

クレーターを挟んで向かいには町、からづじ町と言えるものしかなかつた。

タ

「あ
つ

皆で -10000。以下の冷たい視線を夕にぶつけた。

卷之三

「さあ、行くか」

— そ う で す わ 「

「アーティスト」

夕の叫び声はむなしく響いた

六
六
六
六

「はあ、はあ」

俺たち勇者一行はバカでかいクレーターの中を通り、さっきいた場所の向かい側にきた。

さつきは直径500mだと言つたが、実際はすり鉢みたいな形をしているので、結構こつち側に来るまで時間がかかつた。
ふう、それにしても本当に町はひどいありますま。

家が崩れ、協会が吹っ飛び、食べ物が焼けて灰になつてゐる。

酷いありさまにはなつてゐるが、一応フラグが立つ場所でもあつたので、何か今後の冒険に必要な道具を探してみると、「これは何ですか?」言いながら、ネロが神々しく光るサンバイザー的な形をしたものを持ってきた。

それに俺がふれた瞬間『はーい』と、おなじみの声を出しながら仏陀が現れた。

9

10

『いやいやいや、ちよつと待つてよ数奇さん。僕がフレンドリーに接したからつて神様に「よつ」は無いよ』

何が用すか
んで?

何がせん實れちやつたよ
その調子あそはいとして

サンバイザーみたいな形してるけどさあ、もうちょっとヒマシなネ

ロマンスはなしのたれ

『 そうだよ、これは魔王を倒すうえで絶対に必要な装備だよ。それでね《神の～》ってやつを5つ集めてほしいんだよね』

151

——で？」「うう、このを5つかけて魔王と戦う」と

新編　古今類聚

そういうと仏陀は、シウンッ、と効果音を出しながら消えていった。俺と仏陀の会話を周囲で聞いていた夕たちは、めんどくさそうな顔

をじでしる

「……壁の士氣を高めるのが勇者の務め……俺もめんぐくしてやる」と、
ということで、今回はじっくり締めのセリフを言った。

「いざ次なる冒険へ出発！」

「 「 「 「 「

皆俺の後に続かず、無言で歩いて行ってしまった。
もう心が折れた。

心が折れた回数・7回

続く

次なる冒険の前に少し休憩……そして高藤（前書き）

サブタイトル長くてもいいですね

次なる冒険の前に少し休憩……そして葛藤

「なあ、タ。……サブタイおかしくね？」

「……おかしいところがあるか？」

「俺達大した冒険してないよー？」

「どうも数奇だ。

……」れもつともな疑問だよね。全く、何一つ冒険していないからね。

「……別にいいだろ、スライム倒して、うえいだ菟威蛇亞倒したじゃないか。
何が不満なんだ？」

「全部だよ！ 何が『何が不満なんだ？』だよつ、雑魚倒して、心
が熱くなつたクソみてーな敵倒し ただけじゃん！」

「……いいじゃないか、順調順調」

夕は俺と喋るのをやめて、ネロと話し始めた
もつこいつと喋るのが疲れてきた。

俺達は先ほど仏陀をもう一回呼び出した。次はどこに行けばいいん
だ？ と聞くのを忘れていてね。

まあ、聞いたは聞いたんだけどね。アバウトが過ぎててね。
まあ、どんな会話をしたかといつと。

「おーい、仏陀～」

ピカッと目が見えなくなるような、眩しい光を出しながら、『は～
い』と仏陀が現れた。

「あのせ、次どこ行けばいい？」

『西』

シコツ

といつ会話だつた……会話が成立してない！

まあ、俺達勇者一行もやる気が失せて、瓦礫の山に、座つて休憩してゐるところだつたし、別にいいんだけどね。

そんな訳で、それから數十分何もせず、俺、ネロ、タ、デブは思いの行動をしていた。

ネロは昼寝、デブも昼寝、タは何か思案している、俺は空を見上げ、「ふう」とため息をついていた。

……半数が昼寝していたし、俺は空を見上げて「ふう」と何かつこつけてため息ついてるし。もうこうなると、タのほうが勇者に向いている気がしてきた……と思つてしまつ俺。夕は、昼寝してるネロたちとかつこつけている俺を横目で見ながら、ずっとと考え事に浸つてゐる様子だ。

「はあ、何で勇者になつちゃつたんだろう」改めて思った疑問を口を閉じながら考えてみた。

第一に……何となく
第二に……何となく
第三に……何となく

……俺の頭はおかしいのかもしない。普通なら何となくで勇者になんかなれないよね。

やべ、俺つて……天才？

「……それはない」「冷静にツツ『むなよ！』

傷ついたよ、てかお前心の中読めんのかよ。

「うう……、初めてポジティブに考えのに……」と泣きながらいじけていると、夕が思案顔をやめて

何かを決心した顔で自分のウイングウを出した。

「おこ、タ。お前何やるつもりだよ」

「…………」

完全な無表情で返答しないタ。

「これはタが危険な考えを思いついた時のサインだ。と、俺は思つた。

なぜそんなことが分かつたかといつて、現実世界にいたとき一度だけタとケンカしたことがあった。

その時タは俺の家からすぐに出て行って、何だ?と思つてくると、急に俺のパソコンが煙を立て始めたのだ。

そのあと俺がタに土下座して謝ると、タは「…俺も悪いことをした。お前のパソコンについついウイルスを送つてしまつて」と言つた。ようするに、タが何も喋らずに向かによつとしたら危険といつてだ。

と、いつで寝してたネロ、タブを起ししてタが変なことをしたときに迎撃できるよう身構えさせた。

瞬間、タはメニューの中の『魔法』にタッチして、『世界支配』にタッチしようとした。

「『オルアアアツツツ!』

俺はタの右手を蹴り上げウインドウを閉じた。

その早業にネロとタブは口をポカンとあけて驚いていた。

「…何をするんだ。せつかくこの世界から出ると思つたの」「いやいやいや、お前に何してんだよ! そんなにこの世界から出たいの……」

「おひ」

「何で」「だけ即答するんだよ! こつもの溜めなどついた!」

「……こつもの溜めつて……なんだ？」

「～」「～」『……』？これだよこれ！」

あまりのボケの多さに、はあ、はあと息が切れ。もうこれ漫才だろ。あと、もともとの話の趣旨とだんだん違つてきてるし。

「……だが『世界支配』を使えば一発でクリアできるんだぞ」「こきなり元の趣旨に戻さないでくれるかなあ」
ポカーン状態から元に戻った、ネロとドブも会話をはじめてきた。
しかもタの味方で。

「そうですよ、数奇さん。もうこいつを使っちゃいましょうよ」「僕もそのほうがいいと思いますよ」

「な……っ！」

「、こいつらゲーム世界の中の登場人物だよね！？ 何でキャラクターなのに『世界支配』使っちゃいましょうって言つてんの！？ で、でも使えば出れるし……おっと、あぶねえ。あやうく夕たちの口車に乗せられるとこりだつた。
いや、もうこいつそのこと使つちゃえればいいか！ でもなあと葛藤すること約一時間。ついに結論が出た。

「、」のまま続ける。だから西に向かって歩くべー。

ふう、口車にも乗せられず、折れることもなく、自分の考えを貫き通せた。

皆も文句はありげだけど俺についてこつて……っ。

グサツブツシャアアアツツツ

視界が暗くなつて俺は死んだ。

棺桶状態で、続く。

悲しみの棺桶

『はあ…………』

どいつも、数奇だ。

……ああ～暇だ。なぜ暇かと聞かれればこいつ答える。

俺がいる場所が『棺桶』の中、だから。

なぜ死んでるかつて？ それは…………あれだよ、仲間に殺されたからだよ。

なぜ殺されたかは、俺自身にもわからない。

夕が『世界支配』を使おうとして、それを止めた。そのあと相談して、勇者らしく俺が「ちゃんと旅を続ける」と言つた瞬間、後ろからグサッとやられちゃつたんだよ。

夕は杖の細いほうで思いつきり俺の頭を貫き、ネロは手刀で俺の腹部を貫き、デブは懐から取り出したナイフを俺の腹部に突き刺した。
……酷いよね。

でも一番驚いたのが、ネロが手刀で俺の腹部を貫いたことだね。

いつもの力の十倍はあつたね。

それは置いといて、今、俺が棺桶の中にいるところとは分かってくれ。

勇者一行 今は肝心の勇者が死んでいる は夕が瓦礫の山にした町を出て、西に進んでいる。

仏陀が教える肝心なヒントがたつた一言『西』だったので、あてもなく西に向かつて歩いている。

ネロはさつきから棺桶のほうをチラチラと見ていく。

「でも本当にいいんですか？ タさんの魔法なら一発で数奇さんを生き返らせれますよね？」

と急に喋りかけられた。

「……正直、数奇を一番酷く殺たのはネロやつだと思つんだが。

「まあ、いい。いてもいなくても同じだ」

「いやつ、それはひどくないですかねえ、タさん」

「馴れ馴れしく話すなテブ」

「冷静にそんなひどいこと言わないでトセによー。これならハイテンションでそういうこと言つてくれる数奇さんのほうがよかつた」「ドムなんですね、テブさんつ」

「無邪気にテブさんつて言われるほうが辛いー」

「ドムは否ゼ定しないんだな。

と心の中でシッコんでしまつただった。

『はあ……』

テブに「数奇さんのほうが良かつた」とか言われても吐き戻しながらだけなのだが。

とりあえず暇だ。テブがドムを否ゼ定しなかつたことにだけしか面白くなかつた。

と考えていると。

テレレレレレレレレ~

とお馴染みのバトル突入ソングが流れてきた。

『えつ、ちょつ、まつ、ゆ、勇者不在でバトル突入すんのー?』

いや待てよおかしいでしょ、何で主人公いないのにバトルが始まるわけ!?

と思つていると不意にウインドウが開いた。

どうやら死んでる俺にもバトルの状況が分かるように、ウインドウは開かれるらしい。

俺は死んでるので、ウインドウには 数奇・じの世で最も酷そ

な死に方で死亡 と書いてあつた

つ、ツツコみたい！ けど死んでるから口を動かすことも、体を動かすこともかなわない。

そしてウインドウは全員の能力値などを表示していった。

タ

L V : 12000 H P : 15000 M P 10000

ネロ

L V : 25 H P : 250 M P : 150

デブ

L V : 20 H P : 170 M P : 250

そして敵の情報も現れた。

ラ○カル

L V : 1 H P : 1 M P : 1

「 ラ、ラスカ○ううううううつつつつつつ！」『』

全員一緒にタイミングで叫んだ。

もちろん俺は声を出していないし、外の様子が見えるわけでもない。

が、心の中で叫んでいるし、一緒にいる気がする。

何でラス○ルなんだよ、これ作った奴どんだけ敵とか考えるのめん

どうせかっただよ！

ついには「アラ○グマ ラ○カル」パクッちやつたよ！？
ここまでパクつていい」となんて一つもないぞ！なのに何でパク
つちやうかなあ。

と、思う俺。この反応正しいよね。

「… ゆし殺るか

『何でそこ殺るか。なんだよー。』

声が出ないとわかつていながらツツコんでしまう。

ラス○ルの攻撃・連続寡観都鬼

このウインドウの表示を見て俺はやばいと思つた。

……だつてラスカ〇がやるような攻撃じやないでしょ。普通は、寡
観都鬼じやなくて、噛みつきだもん。やべえ、こりゃ死ぬな。
と思つてみると、デブが「うおっ、あ、牙がでかい……っ！ きい
やあああつつつ！…」

といつ声を出しているのと、何かがバタッと倒れる音がした。
瞬間。

デブが死にました

と、ウインドウに表示された。

やつぱり強かつたかあ、と思つてると、ネロも「いやあああつ
つつつ！…」という声を出した。

そしてまた、何かがバタッと倒れる音がした。

おそらくネロだろうと思つてると、ウインドウに ネロが死にま
した と表示された。

お、おお？ 夕も死ぬのか？ 夕も死ぬのか？

……勘違いしないでくれ、夕も死ぬのかなあ？と心配してただけ
であって、夕が死ぬことに期待しているわけじゃない。

「う、うわああああっつっつーーー！」

バタツ

デスブレイカー・夕が死にました

いよっしゃああああああっつっつっ！

……今のは気にしないでくれ。

まあ、そんなわけで、

勇者一行全滅

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4945y/>

ベタなRPGの中に入ってしまった

2011年12月19日17時47分発行